四季節　（フォーシーズン）　前編

入野　れん

＜主な登場人物＞

クリストフ・デルフィート：EFFO最高責任者（プレジデント）。EFFO 内の通称はプレジ。フランスの国会議員でもある

ルディアン・ライツ：EFFO 幹部の一人。情報部長。通称チーフテン。今の国籍はスイス。

フィリップ・ジョナサン：EFFO 幹部の一人。財政部長。FRB（米国連邦銀行）スタッフ

リチャード・ケン・オーツ：EFFO 幹部会付新米職員

ラヴレンティ＝スヴェルドローフ：在仏ソ連大使館の書記官。実は KGB の少佐。愛称はラーヴリャ

エリザベート・ノートン：EFFO 幹部会事務局長

ノエル・コルト：シャンソン・クラブの歌手

トムスキー中佐：KGB（ソ連国家保安省）の将校

ジダーノフ中将：KGB 幹部

＜用語説明＞

EFFO：世界連邦設立機構。1982 年、フランスの政治家クリストフ・デルフィートらが中心となって創設したＮＧＯ（非政府国際組織）。本部パリ

インペリアル・ルーム：EFFO 本部ビル最上階の幹部会執務室の通称。幹部会メンバーを指すこともある

初出／すんからいし4（1989 年 7 月発行）

十　月

一九八五年、パリ。

秋の陽光は足早に地平線の下へ沈み、街は紫色に染まるとくつろぐ間もなく、闇に支配されていく。

オペラ座近くの一角に店を構えるシャンソン・クラブ、シャノアールのテーブルで、二人の男が声を張り上げる歌手を尻目に、話に熱中していた。

「では、ゴルバチョフはアフガニスタンから本気で手を引くつもりなのか」グレーの背広にブロンドのフランス人が言った。

「ええ（ウィ）。現に着々と準備を進めています。実際には、ソ連内部の反対や現地の調整もあるから数年がかりになるでしょうが」黒髪の外国人が答える。

「……信じられん…」

「信じる、信じないはそちらの自由です」

「ソ連が自分から退くことなど一度

もなかった」
「そうでもないですよ」
若い外国人は事もなげに答えた。
「時期は？」
「パキスタン政府およびそのバックの米国との交渉しだいですね。カルマル政権をこのまま放り出すわけにはいかないでしょうから。早くて三年、遅ければ……見通しは立ちません。それは、ゴルバチョフが失脚した時、ということですが」
「ゴルバチョフ失脚の可能性は？」
「私は、一年以内に失脚する可能性は四分六分と見ています」
「その場合、ペレストロイカは……」
「当然、潰れるでしょう。ただ情報公開の方はともかく、何らかの改革をしなければ、早晩、ソ連が超大国の座から滑り落ちるのは明らかですが」
「……成功するのか？」
危険を冒してソ連に潜入させた自国のエージェントでさえ、めったに手にできない極秘資料を目にした興奮を抑えながら、フランス情報機関の某課課長は、若い情報提供者に矢継ぎ早に質問を浴びせかけた。
「それは神みぞが知る、ですね。はっきり言って少々分が悪いですが、何らかの改革はされるでしょう。でも、ゴルバチョフ政権が三年以上持てば、おそらく世界はかわるでしょうね」
痩せて童顔の情報提供者――ここ数年、ヨーロッパで一、二を争う政治情勢分析の専門家で、ゴルバチョフのコンサルタントまで勤めるという噂もある――は、自信ありげに微笑した。スイスに本部を置く調査会社を数年前につくったかと思うと、あっという間にこの世界の有名人になった。小は個人の家庭問題から、大は世界政治の潮流まで、彼の見解で外れたものはない、というのは噂にすぎないとしても、一九八三年のＫＬＡ機撃墜事件時、一触即発と思い込んだソ連軍をなだめたとか、ゴルバチョフ政権発足を一番早く確認したなど、伝説じみた逸話は数知れなかった。
フランス情報局中堅幹部は、ソ連共産党幹部会会議用の極秘資料――アフガニスタンからのソ連軍撤退計画の原案を大事そうにファイルにしまった。
「では、金は口座のほうに」
「この前みたいに、期限に遅れないでくださいよ」
黒髪は、やんわりと言い、二人は握手を交わした。
課長殿が席を立った後、ルディアン・ライツは店を見回し、煙草に火をつけた。時計を見ると八時。デルフィートはまだ帰っていない時間だ。ルディアンは給仕（ギャルソン）を呼ぶと、スコッチを頼んだ。
曲が、シャンソンからバラードに変

わった。スコッチを片手に、南欧系らしい女性歌手の声に耳を傾けた。胸元がV字にカットされた黒のイブニングドレス、緩く巻いたセミロングの褐色の髪、少し浅黒い肌。声は低めのソプラノで、声量はさほどではないが、よく通っている。今日一日の疲れが、歌に解けて、スコッチに注ぎ込まれていく。

彼女は三曲歌うと、別の女性歌手にマイクを渡した。ルディアンは指を立てて給仕を呼び、今歌い終わった歌手に一杯奢りたい、と言った。給仕は彼女に近づき、ルディアンの方を指しながらしばらく話していたが、やがて彼女のほうからテーブルにやってきた。ルディアンは手振りで、椅子を勧めた。

「飲みものは何を？」

彼女が腰を下ろすのを見届けて、聞いた。

「ヴァイオレット・フィズ」

ルディアンは、給仕に頼んだ。

「あの歌はオリジナル？」

「ええ、そう。私が創ったの」

「曲も？」

「そう。少しピアニストに手直ししてもらったけど」

「初めて聞いた曲だけど、なんだか懐かしくて」

「少しフォーク調でしょ」

ほめ言葉としてはまあまあだと彼女は思った。そこに給仕がフィズを持ってきてテーブルの上に置いた。

「あなた、ずっとブロンドの人と話していたでしょう」グラスに一口、口をつけて彼女が言った。

「よく見ていたね」

「そりゃ気になるわ。私達は一生懸命歌っているのに、ステージ際で全く聞いていないんですもの」

「悪かったよ。聞いていなかったわけじゃなくて、話がつくまで聞き惚れているわけにはいかなかったんだ」

「ビジネスならよそでやって頂戴」

「これからはそうするよ。もう一杯飲む？」

彼女は同じものを頼み、ルディアンが給仕を呼んだ。

「ノエル・コルトは本名？」

ルディアンはプログラムを指して言った。

「そうよ。あなたは？」

「ルディアン・ライツ。本名はルードヴィヒ・ノイルドバルトというけれど、パスポートに書いてあるだけで、誰もそう呼ばない」

給仕が新しいグラスをテーブルに置いた。

「フランス人じゃないのね」

「今はスイス国籍だ。でも血はイギリスやドイツや色々混じっている。君は？」

「フランス人よ。母はアルジェリア出身だけれど」

給仕がやってきて、空になったルディアンのグラスに氷を入れた。
「ビジネスマンなの？」
「国際機関の職員」
「ユネスコとか？」
「いいや、ＥＦＦＯ。知ってるかな、最近できた組織で…」
「私も会員（メンバー）よ」
ルディアンは一瞬、目を見開いた。
「へえ。一般会員（コモンメンバー）？」
「ええ。パリ青年部の。平会員だけど。そんなに驚いた？」
「ああ。そりゃパリに一千人以上の会員、関係者がいるのは知っていたけど。偶然会ったのは初めてのような気がする」
「そうかしら。私はよく会うわよ。現にこの店にも何人かいるわ」
彼女がそこまで言ったとき、ライトが消えて、スポットライトが真っ赤なドレスの女性歌手を照らした。ステージ際の席ですっかり話しこんでしまったな、と自嘲気味にステージに目をやった。
「何だか今日初めて会ったような気がしない」
言ってしまってから、男の口説き文句の常套だと気がついた。
「私に似たガールフレンドがいたの？」
「いいや（ノン）」
「もしかして、私を口説いているわけ？」
「もちろん」
ライトが元にもどった。
「生憎、私、年下は趣味じゃないの」
「僕は二十六だよ。君はそれより上には見えないけど」
彼女はしばらく黙ってグラスを傾けた。
二人はそれからフィナーレの曲が終わるまで、数時間話し込んだ。最後の歌手が舞台から消え、客がぼちぼち席を立ち始める。
「遅くまで引き止めてごめん。送るよ」
「いいえ、大丈夫」
二人は数分間、その問題で揉めたが、結局大通りまでということで合意し、店を出た。
「もうじき、雪が降るわね」パリのスモッグで少しくすんだ星空を見上げて彼女が言った。
「雪は好き？」コートのポケットに手を突っ込んでルディアンが聞いた。
「寒いのは苦手だけど……嫌いじゃないわ」
さすがに夜も更けて、人通りも少なくなったオスマンヌ通りを二人は黙って歩いた。十分ほど歩いた後、彼女は通りから少し入った小さな路地を指差

し、「ここからすぐなの」と言った。
「これで終わり？　中に入れてもらえると思ったんだが」
「――ムッシュウ・ルディアン・ライツ」
「ムッシュウはないだろ。キスしていいかな」
「おやすみのキスならね」
唇が離れても、二人はしばらくそのままだった。
「やっぱり、前から知っているような気がする」
「私は、あなたのような人に会ったのは初めてだわ」
「うーん」
ルディアンは額に手をあてると、彼女からはなれた。
「もう引き下がるの？」
いたずらっぽく彼女が笑った。
「君には真面目に迫りたいから、今日はこの辺にしておくよ。おやすみ」
そう言ってもう一度ついばむようにキスした。唇と唇が軽く触れたあと、彼女はルディアンの頬をそっと離してうつむいた。
「ごめんなさい。私、好きな人がいるの」
「僕もいるんだ。つきあっているわけじゃないけど」
「それで私に迫るつもりなの？」
「そうだよ」
「ひどい人ね」
「そうかな」
彼女は黙った。
「君だって気づいたはずだ。僕たちは波長が合う。今日、納得がいかなくても、一年後には必ずお互いを知り抜いているだろう」
彼女はじっとルディアンを見つめた。
「入って」
「ママゼル……」
「ママゼルはないでしょう。ノエルでいいわ」
彼女はさっさとアパルトマンの鍵を開け、階段を上った。
「ピルは飲んでる？」
「今日は大丈夫よ」
彼女は部屋のドアを開け、スイッチを入れた。
古めかしい、落ち着いた色合いの部屋。少しちらかった衣類。二間続きの奥に、大きな木製のベッド。
「ちらかってるけど。そのへんに座って。お茶を入れるわ」
彼女はバックを置くと身をひるがえし、台所に消えた。
ルディアンの目はその姿を追いながら、まだ光になじめずにいた。それでも少し乱雑な部屋は、妙に彼をつくろがせた。
「ずいぶんおとなしいのね。自分で口説いたくせに」
「思わぬ進行にとまどっているんだ」
口ではそういいながらルディアンは

ティーカップを置いた彼女の手をとり、今度は挨拶ではないキスをした。五分後、部屋の灯りは再び消えた。

十一月

「あ、チーフテンが帰ってきました。二人連れですね」

通常の勤務時間が終わろうとするころ、リチャード・ケン・オーツがEFFO幹部会執務室（イーン・ペリアル・ルーム）の窓から下を見下ろして言った。

EFFO最高責任者でフランス下院議員でもある、クリストフ・デルフィートは、書類に目を落としたまま言った。

「あいつに女を連れてくる甲斐性があったのか」

「でも最近、チーフテンに彼女ができたらしいですよ。もっとも、今日の連れはスヴェルドローフ氏ですが」

デルフィートはちらっとリチャードのほうを見、書類をしまいながら言った。

「おまえはもう帰っていいぞ」

「はい」

素直にリチャードが部屋を出て間もなく、エレベーターのドアが開き、EFFO情報部長のルディアンが在仏ソ連大使館書記官のラヴレンティ・スヴェルドローフを連れて入って来た。

「やあ、デルフィート。そこでラーヴリャに会ったから、一緒に来た」

「こんにちは（ボンジュール）、プレジデント」

「いい加減、堅苦しい挨拶は抜きにしよう、ラヴレンティ」

そう言いながら、ラヴレンティと握手した。

「今、ジュネーブでの米ソ首脳会談の準備で忙しいのでしょう？」

プレジデント・デルフィートは、彼にソファを奨め、自分も腰掛けた。ルディアンは奨められるまでもなく、いつもの指定席に陣取っている。

「はい。ここ一ヵ月、ジュネーブとパリを行ったり来たりで」

「ラヴーリャも当日はジュネーブに詰めるのか？」

ルディアンが聞いた。レーガン大統領とゴルバチョフ書記長の初顔合わせ、ジュネーブ首脳会談が一週間後に迫っていた。

「ああ。ガードを命じられている」

在外ソ連大使館員の多分に漏れず、ラヴレンティもKGB（ソ連国家保安委員会）だった。それも、ゴルバチョフ書記長の側近といっていい特殊な地位にある。

「ほう。もっと年配の人間がやるんじゃないのか」

「もちろん、私が指揮するのではないのですが…怖いのはテロで…いえ、西側のテロリストがどうの、いうので

はなく…ソ連国内の反書記長派分子が油断ならなくなっています」
「暗殺計画が？」
「まだそれは発覚していませんが、時間の問題かもしれません」
書記長自ら命を狙われかねない、ということは、その手足となって動いているラヴレンティらは、さらに危険にさらされているということだった。
「最近、ＫＧＢの大物がやたら亡命してるしな」
「それがまた問題で…要するに私の上司のクリスツォフ将軍は、書記長の特命で、ＫＧＢ内の規律強化――つまり粛清を行っています。それで今までにＫＧＢの幹部クラスのほとんどの過去が暴き出され、足元に火のついた――つまり西側と通じていた者は、次々に亡命しました。国内に残っている者も、心理的に追い詰められています。書記長のペレストロイカが進めば進むほど、それに対する反発も高まっていて…」
ラヴレンティは、やや緊張した面持ちで顔を上げた。
「そんな具合で、当分、ＥＦＦＯのことはできそうにないのです」
「幹部職に不満は？」
デルフィートが問うた。
「とんでもない。ただ、ここしばらくは責任が果たせないので…」
「では、その点は問題ない。こいつはともかく、ＥＦＦＯ幹部なんて、月に一回辛うじて会議に出てくるだけ、なんてのが半分を占めているんだからな。ラヴレンティはラヴレンティの仕事をしながら、ＥＦＦＯを考えてくれればいい」
「ゴルバチョフには何とでも話を合わせておくさ。融通が利くところがＥＦＦＯのよさだ」
ルディアンもそう言い添えた。ラヴレンティ・スヴェルドローフ少佐が入ってきたよりほっとした様子でインペリアル・ルームを出て行ったのは、それから数分後のことだった。

同日午後九時

ラヴレンティが出て行った後、インペリアル・ルームにはデルフィートとルディアンだけが残された。ティーカップの中身を飲み干すとルディアンは聞いた。
「デルフィート、これから時間ある？」
「ああ。今日の仕事は全部終わったが…なんだ？」
「ちょっとこれから、つきあってくれないか」
ルディアンはそう言って立ち上がった。
十分後、二人はルディアンの車に乗ってフリードラン通りを走っていた。ルディアンはほとんど口をきかないま

まオペラ座近くの路地に車を止めると、キーを抜いた。
「降りて。この右側の店だよ」
ルディアンは、ナイトクラブのドアを押して入った。デルフィートも後に続く。
クラブ内は、煙草の煙とアルコールの匂い、ステージでシャンソンを歌う歌手の声と人のざわめきで満ちていた。
「これはルディアン・ライツ様、ようこそ。お飲物は何がよろしいですか？」
ルディアンが隅に近いテーブルに腰掛けると、顔なじみらしい給仕がやってきて聞いた。
「車だからアルコール抜きを。デルフィートは？」
「レミ」
デルフィートは短く言った。
「それからノエルが歌い終わったら、来るように言ってくれる？」
ルディアンは灰皿をデルフィートの方へ押しやりながら言った。
「かしこまりました」
給仕が行くとデルフィートは聞いた。
「ノエルとは誰だ？」
「今歌っている歌手だよ。今日のはオリジナルじゃないな」
目を細めてルディアンはステージを見やった。デルフィートは言われて、改めてライトで照らされているステージに視線を向けた。歌手は浅黒い肌にゆるく波打つ茶色の髪を肩までのばした、二十四、五の女だった。歌は、少しアレンジしてあるらしいイヴ・モンタンの往年のヒット曲だった。
歌手はしっとりとしたよく通る声で歌い終えると笑顔で会場の拍手に応え、ステージを降りた。彼女は給仕から耳打ちされるまでもなく、ルディアンと目が合うと二人のテーブルにやってきた。
「いつ来たの？」
「五分前。今日のも素敵だった」
「終わる間際に来てよく言うわね。でもメルシ」
彼女はそういって立ったままルディアンにキスした。
「今日は彼を紹介しようと思ったんだ」
ルディアンはデルフィートの方を向いた。
「デルフィート、こちらは、ノエル・コルト（ノエル・コルト）嬢（ママゼル）。ノエル、彼は…」
「存じてますわ、我らのプレジデント」
「彼女もＥＦＦＯ員なんだ。コモン・メンバーで」ルディアンが言い添えた。
彼女は手を差し伸べた。デルフィートは慌てて立ち上がると握手した。
「クリストフ・デルフィートです」
三人は座り、ルディアンは給仕にノ

エルの飲みものを頼んだ後、口を開いた。
「彼女と近いうちに籍を入れようと思う」
あっさりそう口に出し、ルディアンはノエルと目を合わせ、うなずきあった。デルフィートは一瞬、何のことか理解できなかった。
「…つまり結婚すると？」
「ええ」
彼女が答えた。
「それはおめでとう」彼女に向かっていい、ルディアンにむけて言った。
「こんな体勢じゃ肩も抱けないじゃないか」
給仕がきてノエルの前にカクテルを置いていった。
「しかし、随分急だったな」
「うん、それはまあ…でも彼女のことは耳に入っていただろう？」
「まあな」
そう言いながら、デルフィートはグラスを取り上げた。
「とりあえず、今日はお祝いだな」
デルフィートが言い、三つのグラスは軽く触れあった。

同日午後十時半

「式はいつだ？」
帰りの車の中でデルフィートが口を開いた。
「わからない。しないかもしれないし」
ハンドルを握りながらルディアンが答える。
交通量はかなり減っていた。デルフィートは黙ったままタバコをくわえ火をつけた。
全く、随分と急な話だ。そう、確かにかなり印象的な女だった。骨もありそうだし頭の回転も速い。適度な色気があって、節度をわきまえている。ステージ用に化粧していたが、過度ではなかった。
「しかし意外だったな」
「何が？」
「結婚相手に歌手を選ぶなんて、おまえのイメージから思いつかなかった。おまえのことだからてっきりどこかのスタッフか女スパイを捕まえるのだとばかりおもっていたが」
ルディアンは声を出して笑った。
「本人も驚いているよ。でも歌手を選んだのではなくて、これと感じた相手が歌手だったってことなんだけど」
車はＥＦＦＯ本部に着き、ルディアンは地下駐車場の定位置に車を止めて、二人は降りた。
「仕事が終わったんなら、部屋（プライベート・ルーム）にもどろうか」
ルディアンがエレベーターのボタンを押しながら言った。二人はこのＥＦ

FOビル完成以来、職員用宿舎のルームメートである。
「ルディ、おまえ家族には知らせたのか？」
「言ってなかった？　僕には肉親がもういないんだ」
ルディはいつもと全くおなじ口調で言った。
「え…ああ」
「母親は二歳の時、父親は学生時代に死んでいるし、姉と兄も若死にしていて、少なくとも付き合いのある肉親はいないんだ」
エレベーターがチンと鳴って、ドアが開いた。二人は人の気配を感じて慌てて灯りがついた廊下を歩き出した。ようやく塗りたての壁の塗料の匂いが抜けかけてきた新築の建物。ガードマンに挨拶して、二人は職員寮のある別館に入る。
「新居はどうするんだ」
「とりあえずバレンヌ街のノエルの部屋（アパルトマン）に荷物を入れてる。子どもが生まれて手狭になったら、また考えるさ」
「つくるつもりなのか？」
デルフィートは少し驚いた。
並々ならぬ危険な仕事を好きでしている奴が、妻はともかく子どもまでもとうとしているのは意外だった。でもそれは、もともと女とは付き合っても一生、妻も子どももつもりのないデルフィートの独身主義からくる発想だったかもしれないが。
「うーん。でも、できてしまえば育てるしかないんじゃない？」
二人の部屋の鍵を開けながらルディアンが言った。
デルフィートはがっくりとして、ルディアンの後姿を見やった。
「この計画性のなさ！　それこそがおまえの真髄だったのをわすれていたよ」
「それに一々悩むほどもう純真じゃないよ」
ルディアンはくすくす笑い、上着を脱いだ。
「何か飲む？　お茶でいいかな」
「男が夜中で二人で茶を飲んでどうする。この間手に入れたナポレオンを開けろ」
「はいはい。ちょっと着替えてくる」
それからガウン姿に着替えた二人は、他愛のないことを話しながら時間を過ごした。十二時を過ぎ、トイレに立ったデルフィートがリヴィングにもどってくると、ルディはソファによりかかって眠っていた。まるで子どもだ。寝顔も。
デルフィートはルディアンをベッドに運ぶと、ルディアンの寝室の明かりを消して、ドアを閉めた。

十二月

「ニューヨーク発パリ行きコンコルド二二一便にご搭乗いただき、ありがとうございました。当機は予定時間を十五分遅れてシャルル・ドゴール空港に到着しました。現在パリは、午後三時十五分です」

英語とフランス語で案内が入った。ＥＦＦＯナンバー３で財政部長、ハロルド・ジョナサンはアタッシュ・ケースを持つと座席を立った。タラップを降りて受けるパリの風は、ニューヨークよりかなり暖かい。もっとも彼が三時間前にニューヨークを立ったときは夕方になっていたが。

長いエスカレーターを下り、入国カウンターを通ってようやく外へ解放される。迎えにきていたＥＦＦＯの専用車に乗り込むと、早速、発車した。

街までのいたるところに、クリスマス・ツリーが目立つ。あと一週間でクリスマスだ。ウォール街の大きなもみの木にも電飾が付けられていた。

ポルト・マイヨーのＥＦＦＯ本部に着き、車を降りると、正面玄関のガードマンも受付の女性も、ハロルドの身分証を見るまでもなく、にこやかに挨拶し、中へと招き入れる。彼は俳優張りのマスクとマスコミでの派手な扱いでＥＦＦＯではナンバー１のクリストフ・デルフィートに次いで顔が知られており、ＥＦＦＯ関係者の中でハロルドの顔を知らぬ者はない、といってよかった。

この時間、デルフィートはまだ国会にいる。ハロルドはまず、財政部に向かった。本部の紫の絨毯を踏むのは二ヶ月ぶり、十月にゴルバチョフ書記長が訪問したとき以来だ。そのあと、米国の一三九〇億ドルに上る財政赤字を解消するための財政均衡法（グラム・ラドマン）の審議をめぐって、彼の所属するＦＲＢ（米連邦銀行）と議会との調整に追われ、十一月のＥＦＦＯ幹部会議には出席できなかったのである。

財政部のある五階に着くと、連絡を受けていた課長数名と秘書が待ち構えており、挨拶もそこそこに二カ月分の報告を始めた。

三時間後、ようやく一区切りつけた彼は最上階の幹部会執務室へ上った。

「久しぶり。今日は早いわね」

幹部会事務局長、実質的には幹部の一人であるエリザベス・ノートンが彼の姿を見て、パソコンのディスプレイから顔を上げた。

「デルフィートは？」

「あと一、二時間かかると連絡があったわ。『虹の戦士事件』、まだゴタついているそうよ」

虹の戦士事件とは、今年七月、ニュージーランドで環境保護団体グリンピースの反核船『虹の戦士』号が爆破さ

れた事件である。その犯人がフランスの情報機関員であったとして、現在フランス政界をゆるがすスキャンダルに発展していた。
「ルディはあの事件を追っているのか？」
「さあ。でもここのところずっとパリにいたから、内容は知っているでしょう」
三十代半ばのノートン夫人は立ち上がり、クイーンズイングリッシュで言った。
「デルフィートはあなたが来るのを心待ちにしていたわよ」
「何かあったのか？」
「それがね……」
そこにバタンとドアが開いて、ルディアン・ライツがタキシード姿で入ってきた。
「やあ、ハロルド、久しぶり。エリザベート、デルフィートは？」
「あと一時間はかかるそうよ」
「そうか…困ったな」
ルディは頭からつま先まで正装で決めこみ、大きな金色の酒の箱とバラの花束を持っていた。
「しょうがない。これだけ置いて帰るか」
「どうした、えらくめかしこんで」
「ん。あ、結婚式だったんだ」
「誰の？」
「僕の」
たっぷり一分間沈黙が流れた。
「ルディアン！！」

一九八六年一月

ゴルバチョフ政権は初めての新年を迎えた。摂氏マイナス三十度まで冷え込んだ前年とは違い、暖冬の新年。クレムリンを中心としたモスクワ市内は、スモッグでくすんではいても一年中で一番美しい冬の青空を満喫していた。
「トムスキー中佐、始めてくれたまえ」
ヴィクトル・トムスキー中佐は、窓から会議場へと視線を移した。こんないい天気の休日だというのに、ＫＧＢＥ幹部は非公式に徴集され、いや、自ら進んで集まっていた。何故ならこの会議の議題は、ＫＧＢの世界戦略でも、アメリカにおける工作活動でも先々月のジュネーブ首脳会談の結果でもなく――これはいくぶん関連してはいたが――彼らの昇進順位争奪戦でもなかったからである。
何もかも放り出して晴天のもとで日光浴をしたいという思いは、すぐさま現実になったときの想像にうち砕かれた。このまま手をこまねいていては、日光浴さえままならぬ――ソ連では日光は決して無料ではない。暖かい黒海地方のホテルや海岸、そして日当たりのよい土地でさえ何の特権もコネク

ションもない者が存分に楽しむのは難しいのだ。

「同志諸君、今日は休日にもかかわらず、重要な案件のため御足労願いました。それでは、ヴァシリー・ジダーノフ中将より発案があります」

トムスキー中佐は議事の進行を始めた。ジダーノフ中将はかっぷくのいい身体を引き締めるように、姿勢よく立ち上がった。

「昨年三月の現書記長就任以来、諸君も知っての通り、我々の友人達の衰退は著しい。閣僚クラスだけ見ても、ネポロジー、マイオーレツ、ソスノフ、カザネツ、ソロビヨフなど十五名に上る。わずか半年の間にこれだけの同志がポストを明け渡さざるをえなかった。さらに」

中将は資料をめくった。「書記長はKGB調査委員会を設置し、ユーリ・クリスツォフ将軍を委員長に据えた。同委員会の目的は、KGB内の内部調査をやり直し、不正疑惑のある幹部の粛清である。しかるに。書記長およびクリスツォフ将軍の辣腕ぶりに対し、我々の取った行動は」中将は皮肉を込めた口調で続けた。

「オルグ・コルディフスキー大佐が五月に亡命し、さらに九月には第七局局長ビタリー・ユルチェンコ将軍がアメリカに亡命する騒ぎがあった。その他幹部クラスの亡命が三名、続けざまに起こっている」

それだけ皆、西側とつながりがあったということじゃないか、とトムスキー中佐は思った。

「このままでは我々の存亡に関わることは、諸君も承知のことと思う。我々は、我々の地位を脅かす者に対し、反撃しなければならない」

若い頃共産主義青年同盟（コムソモール）の共和国委員長をしていた中将は、口を開くと大上段に構えた演説になることで有名だったが、この場に集まった三十数名のKGB幹部は、誰一人そのような皮肉を頭に浮かべなかった。

実際、事態は深刻だった。職長はおそらく、ここにいる者の九割をKGBから追い出し、転職を迫るかさもなくば年金生活者にしてしまうに違いない。やっと手にしかけた特権階級の甘い生活が消えようとしていた。

案外、今のうちに希望退職を願うのが上策かもしれない、とトムスキー中佐は考えた。クリスツォフ将軍が人事権を握っている限り、この会議の出席者が再び日の目を見ることはあるまい。もっともそれは、俺がもう十歳若ければの話だな、とトムスキー中佐は現実にもどった。

「なぜ、我々が日陰に追いやられねばならない？　追われるべきは奴等だ！」

ジダーノフ将軍は語調を強めた。
「二十年近くにわたってブレジネフ時代を築き、支えてきたのは我々だ。我々はこの間に、わがソビエトの超大国としての地位を固め、アメリカに匹敵する国家とした。核兵器に代表される最新兵器の開発に、我々のもたらした情報は不可欠のものであった。また、アンゴラ、中東、アフガニスタンの紛争にあたっても、我々の活躍なくしては、わが国は到底対応できなかったであろう。……我々の現在までの待遇は正当かつ当然のものである」
中将はそこで短く区切った。そしてしんとして会議場の面々をゆっくりと見回した。
「そこで諸君に提案がある。現書記長に対し、組織的に対応してゆかねばならない。私は、そのための委員会をつくることを提案する。最終的には喰うか喰われるかだ。諸君らも覚悟を決める必要があろう」
中将の最後の言葉は、場合によっては書記長に対する非常手段も辞さない、という意味だった。
「それで、このトムスキー中佐が連絡役となり、今月から活動を開始することを提案する。直接的にはクリスツォフ将軍およびその配下の動きを監視し、我々の同志を助け、反撃するための組織だ。異議はあるかね？」
ユルチェンコ将軍とゴルディフスキー大佐がいない今、クリスツォフ将軍に対抗できるのはジダーノフ中将しかいなかった。異議のあろうはずもなかった。
「では、この基本路線に異議のある者は挙手してくれたまえ」
誰一人、手を挙げなかった。もっともここに集まっているのは、ＫＧＢ内の保守派グループ、ないしは現書記長の反対派の人間ばかりを厳選して呼んだのだから、反対はあり得なかった。
ジダーノフ将軍は満足げに頷いた。
「では、細部についてトムスキー中佐から説明がある」
トムスキー中佐は立ち上がった。
「私の考えでは、まずこの組織を三つに分けます。中心がモスクワ、もう一つが国内、最後が国外です。各地区の協力者は、我々の今までのネットワークからリストアップしておきました。少佐以上の士官は名が挙げてあります。私どもでわかる分についてはチェックしておきましたので、後はそれぞれの同志で協力者、敵対者、中間派に分け、協力者および中間派に働きかけを行ってください。ブロックごとの責任者と連絡役をつくりたいので、来週までに人選をお願いします。それから……」
トムスキー中佐は組織づくりに必要な方策を次々に説明していった。自分の首がかかっているだけに、いつもの会議ではあくびをかみ殺したり、考え

る振りをしながら居眠りをしている者も、今日ばかりは真剣に話に聞き入っている。この熱心さがあれば、決して西側情報機関に負けることはないのにとの思いがふとトムスキー中佐の頭に浮かんだ。

「言うまでもないことですが、連絡には充分気を配ってください。なお、この委員会は表向き『ペレストロイカ推進委員会』と名乗ることにします」

「そりゃすごい名だ」

『赤ら顔のボリス』、ワキーシン大佐が言った。

「これなら不審を買うことはないでしょう。同志諸君も表面上『ペレストロイカ』推進役を演じきってください。何といっても現書記長を頂いているのは向こうですから」

中佐は向き直って続けた。

「それから最後に。我々のこの戦いのために、ソ連国家の利益を減退させてはなりません。今まで我々が培ってきた成果を踏みにじり、みすみす西側に利するような行為は厳に避けてください」

これはおそらく、すぐさま皆の頭から忘れ去られてしまうだろう。ジダーノフ将軍が口を開いた。

「質問がなければ会議は終了する。次回は、来々週の月曜日に、ここで行う。会議の名は『ペレストロイカ推進委員会第二回会議』だ」

将校たちは立ち上がり、しばらくざわざわしていたが、やがて会議場を立ち去っていった。

「――中将。実際のところ、勝算はどの程度でしょうか」

トムスキー中佐が聞いた。

「相手を倒すことは簡単だ。ゴルバチョフを消せばよい」

二人だけになった会議場で、中将は懐からパイプを取り出した。

「しかし危険は高いし、我々が賭けに勝てるとは限らん。からめ手でいくしかない」

中将は火をつけ、一服吸った。

「何、大丈夫だ。書記長のペレストロイカとやらを支持しているのは、少数のインテリと党のごく一部だ。国民の大半も、ＫＧＢの多くも改革なぞ望んではいない。我々は必ずしかるべき地位を手に入れるだろう」

中将は話題を変えた。

「クリスツォフは今日、どうしている？」

「今日は自宅にいるはずです」

「あの小僧は？」

「スヴェルドローフはパリです。ＥＦＦＯの新年パーティーに書記長のメッセーンジャーとして出ています」

「ＥＦＦＯ？」

「ご存知ありませんか？　最近勢力を伸ばしている　ー　野心的なＮＧＯです」

「知っている」
将軍は顔をしかめて言った。
「……何の略だ？」
「は？」
「そのＥＦＦＯとやらだ」
「世界連邦設立機構（Earth Federation Founding Organization）…でしたか」
「なんだ、それは。世界連邦？」
「世界を統一して政府をつくることを目的としている組織です」
「……本気でやっとるのかね？」
「さあ。彼らが本気かどうかはともかく…そこの情報部を率いているのは只者ではありません。年は若いようですが、ここ数年、我々の世界、少なくともヨーロッパの情報機関で知らない者はいません」
「誰だ？」
「ルディアン・ライツです」
中将は黙った。
「それがなんだ？　スヴェルドローフとつながっているのか？」
「それはまだ……ですが、ゴルバチョフは相当彼を買っているようです。小耳にはさんだ話では、彼をＩＳＲＳの幹部に声をかけたとか」
「なんだと？　全くの部外者をあんな重要部署にか？」
「どうやら亡命ソ連人の血を引いているらしいのです」
「……まあ、それはかまわん。どうせＫＧＢ最高会議が承知するはずがない。…クリスツォフの動きには引き続き気を配ってくれ。多少、思い切ったことをしなくてはならないかもしれない」
「はっ」
ジダーノフ中将はパイプの煙を残して、部屋から立ち去った。トムスキー中佐は、一筋の日の光とともに会議場にしばらくたたずんでいた。

三月某日

「え、また出張？」
ツーロンから一時間前にパリから戻ってきたばかりのチーフテンは、たまっていた書類から顔を上げた。
「シンガポールのアンワールが来たくないとゴネているだ。俺は今、手が離せない。おまえが行くしかないだろう」
プレジは書類にサインをしながら言った。
「出発、明日でいい？」
チーフテンは取りなすように聞いた。
「俺は構わんが、そうすると木曜日に間に合わなくなるぞ。今月の幹部会に出席しない気か？」
チーフテンはちらっと幹部会執務室（インペリアルルーム）の壁にかかっているカレンダーを見ると、ため息をついた。

「わかった。リチャード、シンガポール行きの飛行機を当たってくれ」
「はい」
今度の幹部会でチーフテンは第一報告者になっていた。欠席するわけにはいかないだろう。リチャードは受話器を取り上げ、空港のチケット・カウンターにつないだ。
「取れましたよ、チーフテン。十一時二十五分のユナイテッド三二五便です」
チーフテンは時計を見た。
「あと二時間ないじゃないか。アパートに戻る時間はないな」
「でも、これを逃すと直行便は明日までありませんよ」
「わかっている。リチャード、ちょっと来てくれ」
チーフテンはリチャードをインペリアル・ルームの外へ連れ出した。
「悪いが、午後になったらノエルに電話をかけてくれないか」
「ご自分でしてください。新妻の愚痴なんか聞きたくありません」
「もちろん自分でもかけるが、彼女は午前中は寝ているし、経由地(トランジット)先からかける頃には、店に出ていて捕まらないかもしれない。今晩、あの店で彼女のバースデーパーティをやる約束だったんだ。事前に知らせないと」
「……わかりました。連絡しておきます」
「頼む。情報部に寄っていくから、急ぎの書類はまとめておいてくれ」
そう言うとチーフテンは、階段を降りていった。

四月

三月のフランス総選挙で、クリストフ・デルフィートはパリ六区から出馬して大差をつけて当選した。一方ルディアン・ライツは、フランスから離れられないデルフィートのかわりに世界中を飛び回り、最高幹部二人を含む七人の専門家をＥＦＦＯに引き込むことに成功した。
これで部長職の空席はほぼなくなり、第二期組織拡大の目標はほぼ達せられたことになる。職員の数は依然足りなかったが（おかげで残業がちっとも減らない）、これは時間をかけて増やすしかなかった。
四月の終わりのある夜、ルディアン・ライツはインペリアル・ルームの自分の席にいた。ここ一カ月、彼がこの部屋にいたのは二、三日しかなかったから、珍しいと言っていいタイミングだった。
「よう。皆でこれからメシを食いに行かんか？」
デルフィートが入ってきて声をかけた。

「悪い。ファックスが入ることになっていて、ここを出られないんだ」
チーフテンが資料から顔を上げて云った。
「じゃあ、ここに運ばせよう」
デルフィートはそう云ってルディアンのそばのソファに腰を下ろした。
「少し顔色が悪いぞ」
「飛行機の中でちゃんと寝てるから。それほど柔(やわ)じゃないよ。あの、デルフィート……」
そこにファックスの通信音が鳴った。チーフテンは立ち上がり、送られてきた内容にさっと目を通した。
「OK。デルフィート、悪いけどこれからアパートにもどる。明朝もどるよ」
「メシくらい食っていけばいいじゃないか」
プレジはソファごしに身体をひねって云った。
「さっき電話したら、ノエルが少し具合が悪いと云っていたんだ。様子を見てきてやらないと」
チーフテンがそこまで云ったとき、デスクで電話が鳴った。
「チーフテン、スヴェルドローフ書記官からお電話です」
「ラヴレンティから?」チーフテンは受話器を取った。
「ルディアンだ。……どうした?原発? 原発が何だ? 聞こえない、ラヴーリャ!」
ひどく嫌な予感がした。その日は四月二十九日だった。
「ウクライナで原子力発電所が事故ったらしい。すぐモスクワに飛ぶ」
受話器をおいたチーフテンはそう言い放つと、早足でインペリアル・ルームを出ていった。

(つづく)